

## 土地履歴調査概要

対象とする土地の履歴調査結果は下記のとおりであった。

1. 件名：中央官衙H街区
2. 調査地：東京都千代田区永田町1丁目55-4他  
地目：宅地ほか  
敷地面積：約16,725m<sup>2</sup>  
今後の土地利用：建築物

### 3. 土地利用履歴概要

当該地は江戸時代初期からの武家屋敷に当る所で、武家屋敷はその後、摂津三田藩九鬼家、鳥居、内藤紀伊守、松平家の中屋敷などが置かれて幕末に至った。

明治維新後は有栖川宮邸や外務次官官邸などの邸宅地などに転用され、昭和20年代からは西側地区は総理府、内閣府施設として、一方、東側地区は個人宅、企業ビルの用地として利用され今日に至っている。平成13年頃からは個人宅、企業ビルの一部が解体され更地化されている。

登記簿、過去の旧地形図、住宅地図、航空写真等の調査結果、当該地は過去に有害物質を取り扱うような工場あるいは事業所の存在を疑わせるような履歴は認められない（別紙1,2,3参照）。

### 4. 総評

以上の土地利用状況調査の結果、対象地においては過去に有害物質を取り扱うような工場あるいは事業所の存在は認めがたく、かつ、汚染物質の埋立を疑わせるような状況も見られないため、土壌汚染のおそれはない。

### 3. 地形及び地質の概要

本調査地は、巻頭の調査位置案内図に示したように、東京都千代田区永田町一丁目地内の内閣府敷地内、内閣府庁舎の東側で衆議院第二別館の南側に位置している。

本章では、調査地の地形及び地質の概要について述べる。

#### (1) 地形概要

東京都区部の地形面区分図を図 3.1 に示した。これより調査地は、武蔵野台地の東縁部、東京低地との境界付近に位置している。

武蔵野台地は、多摩川により形成された扇状地性の台地（段丘面）であり、北は荒川、南は多摩川、西は山地と丘陵によってかぎられる。武蔵野台地の等高線は、関東山地東麓の青梅付近を扇頂として、東方に約 90 度の拡がりをもつ扇形をしており、台地面は南西から北東に向かって緩やかに傾斜している。

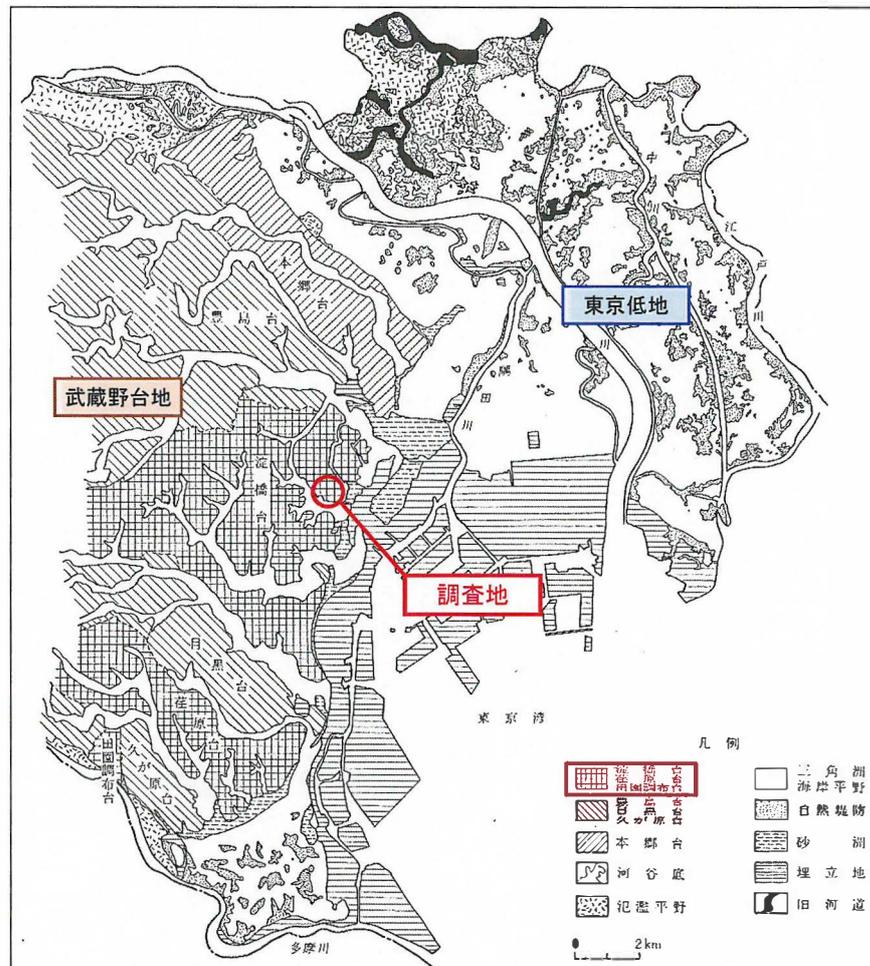


図 3.1 東京都区部の地形分類図

【出典：東京都土木技術研究所『東京都総合地盤図Ⅰ』，p.2，1977】

台地内は石神井川や善福寺川、神田川等の河川により開析され、武蔵野台地上に谷頭をもつ開析谷が形成されている。武蔵野台地は、これらの開析谷を境にいくつかの台地群に細区分されており、内閣府街区は高位の地形面である淀橋台の東縁部付近に位置している。

図 3.2 に調査地周辺の地形分類図を示したが、調査地周辺の淀橋台東縁部では、河川の浸食による樹枝状の小規模な谷（谷底低地）が数多く形成されている。内閣府街区においては、内閣府庁舎や合同庁舎第 8 号館の位置する街区西側は台地部に、今回ボーリング調査を行った街区東側は小規模な谷部に区分されると思われるが、繰り返し行われた建築や造成により原地形は見られなくなっており、街区内の詳細な地形区分は困難である。

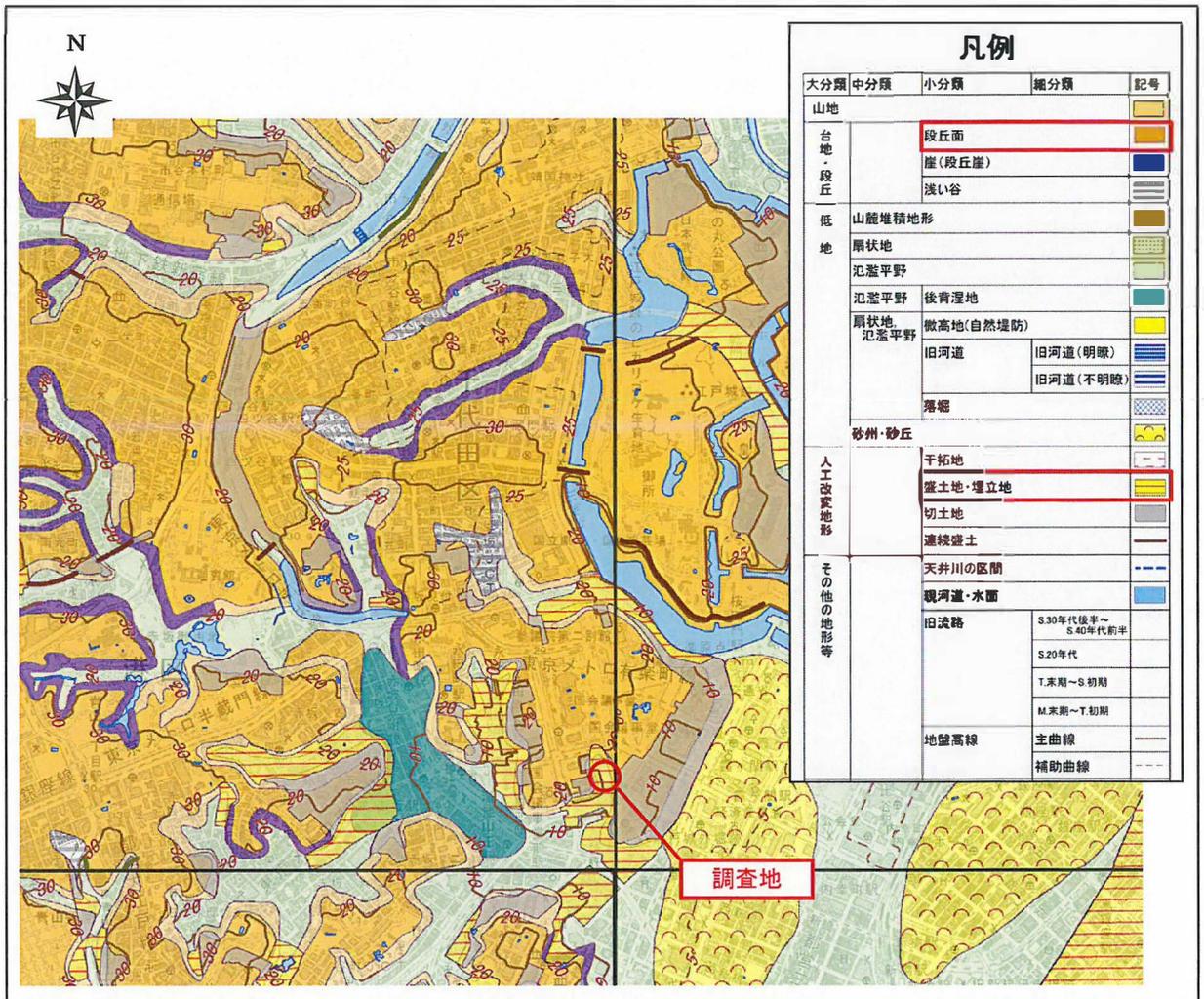


図 3.2 調査地周辺の治水地形分類図

【出典：国土地理院ウェブサイト (<http://www.gsi.go.jp/kikakuchousei/kikakuchousei40182.html>) より】

調査地周辺の陰影起伏図を図 3.3 に、明治初期～中期に作成された迅速測図と現在の空中写真  
図 3.4に示す。

明治期の迅速測図からは、現在の外堀通りに存在した「溜池」の北東部に、調査地付近へと続く  
小規模な谷の存在がみられる。



図 3.3 調査地周辺の陰影起伏図 ○:調査地

【国土地理院の基盤地図情報 数値標高モデル (5m メッシュ) をもとに、「カシミール 3D」で作成。  
フリーソフト「カシミール 3D」著作権者：DAN 杉本 (<http://www.kashmir3d.com/>)】

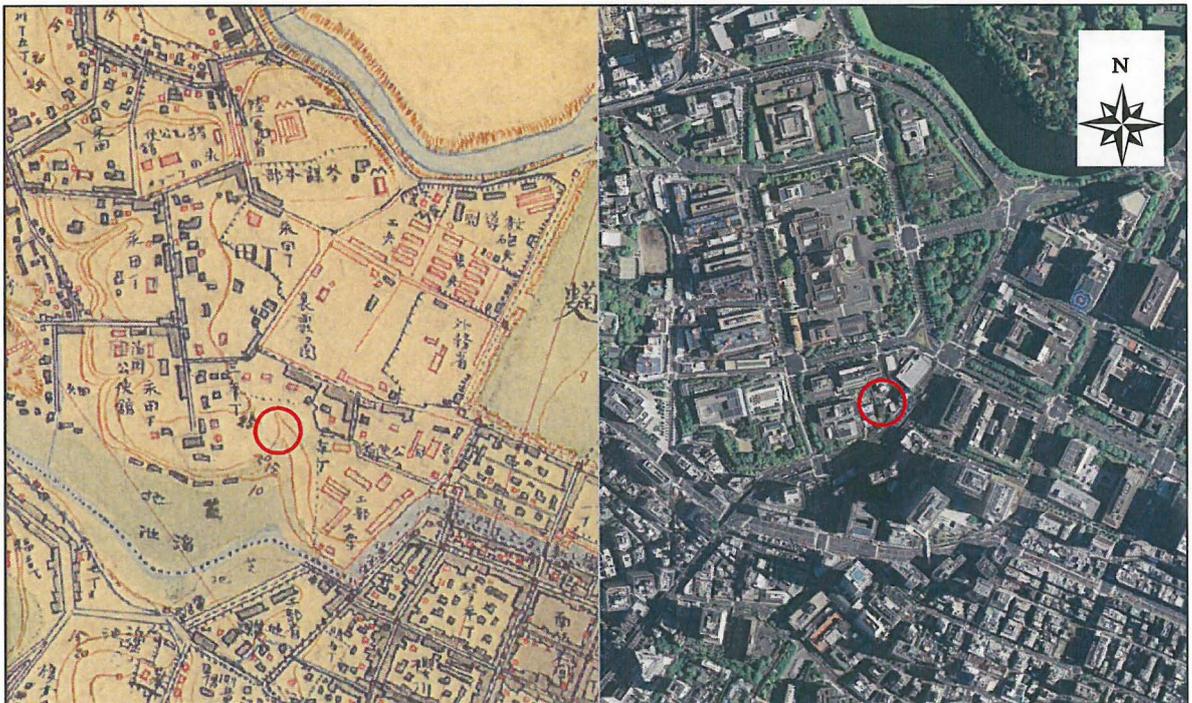


図 3.4 迅速測図(明治初期～中期)と調査地周辺の空中写真 ○:調査地

【出典：国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センターのウェブサイト  
([http://habs.dc.affrc.go.jp/habs\\_compare.html](http://habs.dc.affrc.go.jp/habs_compare.html)) 『歴史的農業環境閲覧システム』 より】



前頁の模式断面図によると、調査地周辺の台地部（淀橋台）では、上総層群（※）の上位に更新世堆積物の東京層群（Tos・Toc・Tog）が堆積し、さらに上位には関東ローム層（Lm）が分布する。一方、低地部においては、表層のローム層が開析により欠層となり、完新世堆積物である有楽町層（Yus～Ylc）が谷を埋積している。

（※）東京層群下位の江戸川層（Ed）の地質時代については、表 3.1～3.2 に示すように、研究者や文献資料等で異なっており、本報告書では既往調査資料（『中央官衙 H 地区(05)敷地調査』、H18. 3) を参考に、江戸川層を更新世堆積物として扱う。

表 3.1 東京都区部の地質層序

地質時代	台 地 部					低 地 部							
	淀橋台, 荏原台	豊島台, 目黒台	本郷台	立川台	河谷底	地層の重なり方から見た地盤のタイプ							
						A	B	C	D	E	F	G	
沖積層	黒色腐植土 黒土					沖積層(A)軟らかい粘土, 泥炭	表土・盛土・埋土 有楽町層 { 上部(Yu): ゆるい砂, 砂礫 (Yu, Yl) } { 下部(Yl): 軟らかい粘土						
洪積世	立川ローム (Ta)					場所によって違うが、沖積層の下位に分布する主な地質 ↓ Tag	七号地層 (Na), やや軟らかい粘土とやや締った砂の砂礫						
	武蔵野ローム (Mu)						埋立ローム (bl) 埋設段丘地層-1 (btg-1)						
	ローム質粘土 (to)					埋設段丘地層-2 (btg-2)							
	ローム質粘土 (to)												
	本郷層 (Ho) や や締った砂, 砂礫					Ho							
	武蔵野礫層 (Mg)					Mg							
3	東京層 (To)					To							
	東京礫層 (Tog)					Tog							
	江戸川層 (Ed)					Ed 締った砂, 硬い粘土, 砂礫の互層							
3	上総層群 (Ka): 締った砂, 泥岩よりなる。(三浦層群とも呼ばれている)												

【出典：東京都土木技術研究所『東京都総合地盤図 I』, p.3, 1977】

表 3.2 東京都区部の地質層序表

時代	更新地層 年代	区地 分層	層 序	
			山の手台地	下町低地・埋立地
完新世	1	沖積層	谷地堆積物・泥炭・黒土	有楽町層
			立川 L	七号地層
後期更新世	2	堆積層	立川 L	埋没ローム層
			武蔵野 L	埋没段丘地層
			下末吉 L	武蔵野礫層
			成増層	
中期更新世	15	洪積層	東京層 (複数層準の礫層)	高砂層
			江戸川層	
前期更新世	73	上総層群	舎人層	
			東久留米層	
第三紀	200		北多摩層	
			三浦層群	

単位: 万年前 N: プリュヌ正磁極期, R: 松山逆磁極期  
L: ローム層

【出典：公益社団法人 東京地学協会『地学雑誌 116 巻 3 4 号』, p.410, 2007 より一部抜粋】